主　論　文　要　旨

報告番号	甲 ㊁ 第　　号	氏　名	堀　場　裕　子

主 論 文 題 名

Climacteric symptoms in postoperative patients among endometrial cancer, cervical cancer, and ovarian cancer: a cross-sectional study
（婦人科癌術後患者における更年期症状について:子宮体癌、子宮頸癌および卵巣癌の比較）

（内容の要旨）

婦人科癌患者の5年生存率は他の癌種より高く、婦人科癌治療後の患者が多く存在する。婦人科癌の子宮・卵巣切除による治療は、女性らしさの喪失やエストロゲン供給源である卵巣摘出による人工閉経に起因した更年期症状など、婦人科癌特有の身体的・精神的影響が顕著に現れる。婦人科癌患者の中でも特に子宮頸癌患者のquality of life（QOL）は治療後も不良で、不安・抑うつ・怒り・混乱の程度が高く、身体的・精神的な健康関連QOLが低いことが報告されている。そこで本研究では、子宮体癌、子宮頸癌、卵巣癌のため子宮・卵巣切除術を施行された患者において、特に更年期症状の転機に関連する危険因子を明らかにすることを目的とした。

対象者は，婦人科癌治療のため開腹子宮全摘術、骨盤内のみまたは骨盤内＋傍大動脈リンパ節郭清，両側付属器切除術を受けたのち1999年1月から2016年7月までに慶應義塾大学病院婦人科健康維持外来を受診した患者とした。外来初診時年齢、body mass index（BMI）、癌の種類、手術時年齢、手術年月日、手術時の閉経の有無、化学療法や放射線療法といった補助療法の実施／不実施といった情報を診療録で調査した。更年期症状は、血管運動症状（のぼせ、発汗）、不眠（入眠困難、中途覚醒）膣症状（膣の乾燥）とし、初診時に患者自記式質問票を用いて評価した。症状の重症度に対する独立変数の影響を比較するために、多変量線形回帰分析を行った。独立変数は、癌の種類、手術時年齢、手術から健康維持外来初診時までの経過時間、BMI、手術時の閉経の有無、補助療法の実施/不実施とした。さらに、複数の更年期症状と有意に関連した、手術からの経過時間と、癌の種類によって、症状の重症度を比較した。3群の比較には、連続項目についてはKruskal-Wallis検定、次いでHolmの方法で調整したMann-Whitney U検定、名目区分についてはFisherの正確検定、次いでHolmの方法で調整した比率の差の検定を採用した。対象者は525人（子宮体癌328人、卵巣癌90人、子宮頸癌107人）であった。

多変量解析の結果、若年で手術を受けた患者では血管運動症状の程度が高く、手術からの経過時間が長くなると血管運動症状と不眠が改善したが、膣の乾燥は改善しなかった。癌の種類は、ほてり、膣の乾燥、中途覚醒の重症度と有意に関連し、子宮体癌では卵巣癌、子宮頸癌に比べて軽度であった。さらに、複数の変数と関連がみられたほてりと中途覚醒についてサブグループに分けて比較した。ほてりは手術時年齢で分けると癌の種類の有意差が消失したが、術後1年以上でも3群間の有意差は残存し、子宮頸癌患者の方が子宮体癌患者よりも症状の程度が高かった。中途覚醒についても、術後5年以上でも3群間の有意差は残存し、子宮頸癌患者の方が子宮体癌患者よりも症状の程度が高かった。

子宮頸癌の場合、子宮体癌や卵巣癌の場合よりも、積極的な対症療法や長期間のフォローアップなど、より濃厚で迅速な介入が必要であると考えられた。